夢屑

島尾敏雄

夢屑

島尾敏雄

講談社

夢屑（ゆめくず）

昭和六十年三月二十日　第一刷発行
昭和六十年四月二十五日　第二刷発行

著者――島尾敏雄
© Toshio Shimao 1985, Printed in Japan

発行者――野間惟道
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号一一二　電話東京〇三―九四五―一一一一　振替東京八―一九二〇
印刷所――信毎書籍印刷株式会社　製本所――株式会社黒岩大光堂
定価――一五〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-201836-5(0)（文1）

目

次

夢屑 7
過程 31
痣 63
幼女 83
マホを辿って 95

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

水郷へ　127
石造りの街で　149
亡命人　175
初出掲載誌　200

装幀　辻村益朗

夢

屑

夢屑

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

真夜中だったが取りに行く物があって、同じ構内の図書館に行かなければならなくなった。たしかそれを館長室のどこかに置いていたはずなのだ。だが誰も居ないまっくらな建て物にひとりではいるのは心もとなく、妻を伴なうことにした。裏口からはいってそれを探しているあいだ、妻は表の方に行っていた。用がすんだ私は帰ろうと思い、裏の出口で待っていたのに妻はいっこうもどって来ない。何のつもりか玄関のガラス大戸を開けたり、書庫に電灯をつけたりしているようなのだ。「もう帰るぞ」と声をかけたが返事はなかった。と、怯えたようにすーっと走って来て、ドアの外でノブを持っていた私のそばをすり抜け、前庭をつっきって家の方に駈けて行った。「どうしたのか」と声をかけたが返事はなかった。家に何か異常でも見つけたのか。とにかくドアを閉めようと、内がわのボタンを押しておいてノブを強く引っぱったが錠はかからない。あせるとかえって依怙地のようにうまくいかず、ノブはゆるんでぐらぐらになった。あとで直すつもりで立ち去ろうとすると、館長室の電灯を消し忘れているのに気づいた。ままよ放っておけ。何だかざわざわ胸さわぎが押し寄せ、何でもないようにと祈る思い

で急ぎ足にもどって来ると、くらい庭のトマトの生い茂ったまん中に年配の男が突っ立っている。おや、と目をこらすと、それとどれほども離れていない場所に、しゃがみこんだ妻が下を向いて土をいじってるのだ。突然何とも知れず身ぶるいのした私は駈け出していた。いつのまにか右手につかんだ竹の棒で、男をめった打ちにしようと思ったのだ。やられるかも知れぬ！とちらと不安がかすめたが、とどまりようもなく、いきおいをつけるためにわーっと声を張りあげ、男めがけて体当たりにつっかかって行った。

何気なく隣家に目を移すと、畳の部屋のまん中に赤ん坊を抱いた若い女が坐って居た。まだ中学生ぐらいのあどけない顔だ。私を認めると、あれ、といったふうに目をまるくし、自分の右手を頭の上にのせた。思わぬところで私と会ったことに余程びっくりしたようだ。図書館に遊びに来ていたころも、突然頭のしんが痛くなったと言っては、手のひらをおかっぱ頭にのせていた。まだ小学校の三、四年生だったが、いつも仲良しの友達と二人で、館長室の窓の下から私を呼んだ。なつかしいな。しかしとにかく今はもう人妻になって赤ん坊を抱いている！

家人がみんな出かけ私ひとり奥の部屋に居ると、玄関の方で物音がした。行ってみると六つ

ぐらいの男の子がはいりこんで居て、私をじっと見上げている。額になまなましい切り傷の跡を残した脳の弱そうな顔にうっすら笑いを浮かべ、ひとりで来たと言っていた。「おなかすいたか」ときくと、すかないという返事はするがその口の下からチョコレートが食べたいなどと言っている。「買ってやるから待っておいで」。言いおいて奥にはいり、外出の用意をして来てみると、もう子供は居なかった。とにかく家の外に出て見渡すと、緑橋のたもとの鉄柵に寄りかかってぼんやりしている。しかしどうしてこの子供のあとを追っかけなければならぬのかと、急に馬鹿らしくなって家にもどることにした。すると庭の隅にいつのまにはいったのか見知らぬ男が二人居た。金網垣の基柱を利用して濡れた糸を張り渡している。「何をしているのですか」ときくと、「糸を乾しているんだ」という答えであった。遠慮のきもちなどちっともあらわれてはいない。「ひとの家の庭で何をするんだ」とつい高ぶってなじると、「隣人のよしみで庭先ぐらい貸してくれてもいいではないか」と逆ねじを食った。私は鼻白み、切り返す言葉もみつからない。「あのね、とにかく、気が散って仕方がないから、出て行ってくれないか」やっとそれだけ言えた。彼らは黙したままそれでも一旦はかけた糸を取りはずすようであった。やはり、あの子の始末をしてやらなければいけないと思い直し、ふたたび緑橋に引き返して来ると、子供はまだそこに居た。手を引っ張って四谷交番所に来ると、どうしたことかその

建て物が見つからない。確かにここだったのに、と狐につままれたようだ。しかしそれは私のきもちが浮いていたからだ。交番は道路拡張工事のあいだちょっと離れた路地に臨時に引っ越していただけだ。しかし巡査はどこに行ったか居なかった。どうしても本署まで連れて行かなければなるまいと心に決め、古見本通りを本署のある港の方に歩いて行った。子供は私の手を振り切って走り出そうとし、そうはさせまいときつく握っていたつもりがつい手離してしまい、はっと正気づくと先の方を走って行くうしろ姿が見えたのに、どうしてか見失ってしまった。

電車が郊外に出たところは一面の田んぼだった。稲が実って黄金の色に色どられている。窓の右も左も黄金の色。まったく黄金色だなあ！　とまじまじと見据えてみた。窓に迫る岡の木も、よく見ると紅を帯びた花をつけているのに、稲の色が反映して黄金色になっている。世界はすべて黄金色。自分のからだまで黄金色に染まってしまったみたいだ。

ふとんをかかげて見た炬燵の中は、ごみがいっぱいたまっていた。そのごみの中に二匹ばかり虫が居る。一匹はやもりに似ている。いやとかげに似ているのかも知れない。もう一匹は何

だかわからない。二匹とも悪いにおいがしてごそごそ動いていた。早くつかまえて捨ててきてほしいと妻に言われ、こわごわ新聞紙でつかみ取った。やもりの尻尾が半分ばかりはみ出たので、手にさわらないよう新聞紙を幾重にも折りまげて、包みくるんだ。押しつぶしたわけではないから中で生きているにちがいないが、自分の手で殺すのはいやなきもちなのだ。私は自動車の行き来の多い道路に出て行った。曲りかどの、コンクリートのように固まった地面に食いこんだ石を掘り起こし、虫を包みこんだ新聞紙を石のあとの凹みに押しこんで、またもと通り石をかぶせ、足で強く踏み固めた。石が浮き上がった恰好になってしまって気になったが、こうして置けば、その上を何台となく自動車の通り過ぎるうちに、中の虫は押しつぶされてしまうだろう。これで大丈夫だ！　とくっついて来た長男を振り返って話しかけたが、何だか自分に言いきかせているようにひびいていた。

アザマゴ通りを歩いていると、一軒の家の座敷に亀井さんがふとんをかけて寝ている姿が見えた。枕もとには恵原さんが坐っている。通りからなぜかはっきり見えた。そして、「今年中にもうひとり必ず死ぬよ」と言っている亀井さんの低い声が、耳もとでささやかれたようにはっきりときき取れた。低いけれどもよく通る声だ。ひょっとしたらそのひとりというのは自分

のことではないかと、なぜかそう思えて、すっかり寂しいきもちに覆われてしまった。町並みには人家がつづいていたが、にぎやかなところのない木造のうす暗いしもた屋ばかりだ。郵便局の裏の路地に、道に面した部屋で戸をあけ放したまま碁を打っている家があるので近寄ってみると、やっぱり亀井さんと恵原さんだ。私を認めた恵原さんが、私の方は見ずにつづけて碁石を打ちながら、「率直に言うと、あなたはぎょっとするほど痩せて見える。顔色もよくないですよ」とぼきりと言ったのだ。私は今日は大分元気になったねと言われるつもりでいた。自分ではからだの調子がよくて、楽な気分の、元気そうに見える気に入りの服装も着けていたのに。しかしひとが見るとそうは見えないのか。山ぎわの矢の脇の方に行けば、先行き明るくなりそうな予感がし、糠喜びかもわからぬと思いつつ、そっちの方に歩いて行った。

家族四人いっしょに入定の儀式に加わろうと心を決めた。考えぬいた末のことながら、いよいよとなると一抹の未練があった。妻と二人の子供の顔をうかがうと、別に動揺しているようでもないので、これでいい、と思うことにした。どうせいつまでも生きられるものではない。決心してしまうと時刻のどんどん過ぎて行くのが痛いほどわかる。しかしこの「時」もやがて意味を失ってしまうのだ。もうひとり私たちといっしょに仏教の僧侶が儀式を共にすることに

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c